

【代表研究者】

川村 佳男

國學院大學大学院 文学研究科 博士課程

【研究題目】

四川盆地における「漢化」の検証

- 特に土器生産体制の変遷を中心として -

【研究の目的】

中国古代史における秦漢は、春秋戦国時代という長い分断の時代の帰結としての、統一化された時代であると一般に理解されている。特に周辺地域の文化は、中原地域の先進文化に自然と同化していくものとするイメージがなお根強い。しかし同化が進行していく具体的な状況、さらには同化という評価そのものが考古学者によって十分に検討されたことはない。

私はこれまで、周辺に位置する四川盆地で伝統的な文化が漢文化と同化（「漢化」）していくプロセスに関心を持ってきた。この地域でも「漢化」は秦の版図となる戦国時代後期から前漢中期の武帝期を頂点によどみなく連続進行するプロセスとして捉えられている。そこで本研究では、この四川盆地における「漢化」がいつ、いかなる様相を見せつつ進行していったのか、土器の生産体制という視座から具体的に明らかにし、最終的に「漢化」という評価そのものを検証したい。

【研究の内容・方法】

本研究の目的である「漢化」の検証に適した考古学資料は、当時もっとも一般的であった手工業製品の一つ、土器である。その普遍性と可塑性は、文化や社会の変化をきわめて鋭感的に

反映するものと見込まれる。特に土器の表面や断面に残された製作痕からは、使用された技法のみならず、その痕跡同士の重複関係から製作の手順までも窺い知ることができる。これら製作痕から復元される土器製作の工程と採用された技法や工具の体系（製作技術系）は、土器に代表される当時の手工業製品の生産体制の変化にもっとも感応した属性と言える。ひいては生産体制の変化を要請した経済体制や社会の変化に対しても考察を及ぼすことができよう。

しかし土器の製作技術系を明らかにするためには、出版されている報告書だけではデータ不足であり、現地で資料を直接観察するしかない。そこで私は北京、陝西省、河南省の各地の博物館、考古研究所や大学の倉庫を訪れて、出土した土器の实地観察を行い、当時の政治的中心地であった西安、洛陽エリアにおける土器の製作技術系を把握した。さらに四川盆地で遺跡が豊富な地域の博物館、考古研究所等でも土器の観察を行い、戦国時代から漢代にかけての四川盆地における土器の製作技術系を分析した。

これら実地観察を通して得られたデータから、西安、洛陽地区といった二つの漢文化の中心地で土器の製作技術系に漢代のどの段階で、どのような変化が生じたのかを明らかにした。また四川盆地における土器の製作技術系に生じた変化の時期、様相なども明らかにし、西安、洛陽両地区でのパターンと比較しながら、四川盆地において展開していった土器の生産体制の変遷プロセスおよびその背景について考察した。

【結論・考察】

前漢の首都、西安地区の土器には、戦国時代の洛陽地区で発達した総轆轤挽きや、外型を用いて成形から施紋・調整までの工程を一括して行う型作りといった技術系が前漢前期に早くも普遍化する。これは副葬専用に作られた彩絵土器の流行と相まって、大量の土器を効率よく生産、消費させるための経済体制が整ったことを意味する。

四川盆地の土器でこれらの新たな技術系が本格的に採用されるのは前漢中後期からである。しかし当て具や縄を用いた套接技法など四川盆地に伝統的な技術系は、中原地域から伝播した形態の土器製作にさえ採用されるなど、前漢中期以後なおも根強かった。総轆轤挽きなどの新技术系が同地域で完全に主流となるのは、後漢初頭の頃であり、同じ頃に流行し始めた崖墓に必要な副葬品などを大量に生産できる体制へとようやくシフトが完了する。

しかし後漢の四川盆地に確立した土器の新生産体制は、漆器や後世の陶磁器といった特産品の場合とは異なり、一定域外までカバーするものではなかった。少なくとも土器生産から見た「漢化」とは西安、洛陽という中央による周辺の単純な同化、統一化を意味するのではなく、各地の周辺地域において市場経済圏が個々に勃興していくプロセスであった。